

第1回 クロスロード (crossroads)

岐路に立っているあなたへ

生き方を選択する岐路に立った時どうしたらいいのか？

岐路に立っていると思ったときにどうふるまうべきなのか？

誰もが突き当たる悩みだと思いますし、正解がはっきり言えるものでもなく、ましてやあとからやり直しがきくものでもありません。

うまくいったと満面の笑みを浮かべることもあるでしょう。反対に結果がついてこず、その選択を悔やむこともあります。その時は後悔しても時間が経ってから振り返るとあれでよかったと思えることもあるでしょう。

プロセスとして決定に納得していたか、また選択後の人生や仕事への前向きな感情が得られたかどうかによって決まると思います。

これは当センターで働いてくれる医師を募集し、採用につなげたいと思って書いているコラムです。あなたがこのコラムを見ているとすれば、あなたは現在の自分の境遇に疑問を持つか、少なくとも漠然とした不安をお持ちなのではないでしょうか。

恥ずかしながら医師という職業について 35 年にもなります。いろいろな立場で自らのキャリア形成を経験し、さらに少ないながらも後輩医師のキャリア支援も経験してきました。うまくいったことも、そうでないこともありました。そういった経験から医師のキャリア形成についてはこれまでいろいろ考えてきました。そうした経験のいくつかを思いつくままに拾い上げてこの文章を書いています。ときどき極端な意見を言うと思いますが、批判されることは覚悟のうえです。批判されなかったら書く意味はおそらくないのでしょうか。

岐路の話に戻ります。

私は時々、高校卒業後の進路決定の際に医学部ではなく、文系の学部に進んでいたらどうなっていたらと考えることがあります。実際に少し悩みました。私にとって文系、特に「文学部」進学は心の深いところに憧れとしてあったものですから。ちなみに私が大学進路を選んだ時には、文学部というのはごく普通の選択肢でした。現在ではそうでもないようですが。結局は医学部進学の道を選び、ここにその結果としての自分があります。別に医師という職業を選んだことを後悔しているわけではありません。ただできれば映画のように時をさかのぼってパラレルワールドに入っていて、違う人生を経験してみたい、と思うだけです。その世界の自分は、不遇をかこちながら、あの時医学部に行っていれば、と愚痴を言っているのかもしれない。

医師としての職業を選択すると、通常は他の生業に関わることは珍しいのではないのでしょうか。医師と作家との兼業は昔から有名ですが、数はごく限られます。私もそうなりたかったのですが、それに向かう熱意も必要な才能もなかったことは最近はっきりわかりました。最近では超優秀な方は法律家・コンサルタント・起業などにいろいろな選択肢もあるようですが、才能に恵まれた人の特殊例でしょう。

医師としての職業を生業としたのちに、大きな岐路に立ったことは何回かあります。だいたいは専門性や帰属先の選択と、それによって自動的に生まれる職務経験キャリアの選択の問題でした。でも自分で自由に選択したというよりは、とるべき選択肢が決まってしまうようなものでした。違った選択をしていたらどうなったか、その結果はある程度具体的に想像できます。

若いころは特にそうでしたが、選択の機会の中で取りうる可能な選択肢が見えていなかったということもあります。私の若かったころは医局の中での既存の流れに乗る以外の道は本当に限られていました。実は選択肢はもっとたくさんあったのに、情報がないために気づくことができなかったのです。医局の関連施設の枠だけでなく、知人からの紹介、人材紹介会社など、情報があれば選択肢は広がりうるのです。

さて、私の岐路の話でした。

岐路の一回目は大学で助手（いまの助教）かつ医局長をやっていた時です。医局運営で教授の方針に立てついて（すみません）、その後医局長の権限を使って、忙しいので有名な病院に自分から異動できるように人事を調整しました。その時は2度と大学に戻ることはあるまいと思っていました。

その後教授も変わり、それに伴ってひょんなことから大学に呼び戻されました。前の教授にたてついたのが評価されたということがあったのかもしれませんが。人生何がどう影響するかわからないものです。そのころの私は専門性を高めるということで、大学でのキャリアを重視していましたから、人事自体は満足でした。しかし大学に戻った後に疾患別のリーダーをまかされたとはいえ、周りの大学や有名病院には自分の先輩で、かつより優秀で技術も優れた人たちがごろごろいました。いっぼう自分は臨床的にあまり自信のあるところまで出来上がっていない、でもいちおう大学を代表しているので変なことはいえない、というわけで、とてもつらい数年間を過ごす結果になりました。

そうこうしていて限界を感じていた時、これからの私の人生はどうしたらいいのだ、と、思えば知らずに「おそらく岐路に立っている信号」を出していたのだと思います。友人を通してひょんなことから話をいただき、それまでまったく縁がなかった遠く離れた病院に就職しました。岐路に立つと、おそらく人間は信号のようなものを出す。また自分でも落ち着かなさを感じる。そういった結果で声がかかったのだと思います。

例えば自分のまわりの方を見ている、キャリア形成の過程でそういうことが10年に一度くらいは訪れる。特に医師にとって最大の難関は40台後半から50才はじめくらいなのではないでしょうか。自分自身のアカデミックな意味でも体力的な意味でもそうですし、また自分のその時点で属している組織(例えば大学医局)の維持の側面からも影響が及びます。いつまでもその地位にしがみつかないでと、周りの目は訴えているようで、自分は不安にいたたまれなくなる。その時に当事者は信号を出し、周りにその信号が伝わる。でも一般的には自分の力、情報網ではなかなか転職を実現するのは難しい。でもふつうは医局の人事ではそんなに望ましい転職先がころがっているわけではない。私の場合はたまたま友人が声をかけてくれましたが、そういう機会に誰もが恵まれるわけでもない。ネットの医師募集を見ても、いまひとつピンとこない。そういう時にどうしたらよいのか。

とどのつまり、流れに乗るしかありません。流れが来なければ待つしかありませんし、流れを作ってもらおうようにする。流れが来たらそれをうまくつかむ。自分だけで流れを起こすことは難しい。ただ流れを作ってもらえるよう、常日頃実力を磨くなど準備は怠らない。私はこれまでそうやってきました。

すこし残酷な話をします。

皆さん、自分で自分のキャリアは決めたいと思っていますよね。でも職業人生におけるキャリアは残酷なものです。大学入試は点数勝負という意味で公平で、客観的評価が可能とされています。自分が頑張ればなんとかなります。ところが会社などの採用は総合的などという言葉にまぶされていて、判断基準が曖昧なわからないものになっています。また基本的に募集は常時あるものではなく、採用条件も決められ、採用する側の主導で門戸が開かれるものです。高いキャリアを目指して、自分で選んで希望先の進路を応募しても、相手が受け入れてくれるわけでは決してない、というわけです。

自分でポストをつかみ取ろうと熱望するほど、獲得できなかったときに、自己評価と現実との乖離に直面せざるを得なくなります。つまり自分の能力や可能性が認められないことに気がついて傷つくことになる。これは現在の就活生たちが就職活動の中で直面しているようですが、メンタル的にはかなりこたえるものでしょう。

「自己評価は他者による評価よりずっと高いからね。」

「自分が恵まれないのは、トップの教授が悪いからだ、大学に人を選ぶ目がないからだ、と、文句を言っている方が傷つかないで済むのさ。」

というのも真実です。

専門領域のトップになる人は限られていますし、なったとしてもその立場を永遠に保持できるわけではありません。専門領域でのキャリアアップについては、それしか人生の価値を認めないというのであれば別ですが、ある程度のところで見限ってそれまでのキャリアから自由になった方が楽かもしれません。価値観が変われば世界も変わります。最後に納得して満足できる可能性があるのは、他人が下した判定ではなく、自分でした決断ですから。

自分のキャリアをどうしていくかということについては、身近の先輩の例なども参考になると思います。60 台を超えての最終的なキャリアの変更についてはいろいろ目にされていると思いますが、専門性の最前線に座り続けて、ものすごく活躍できるものではないだろうと思います。もう少し若い年代であれば、や今までのキャリアを生かして、いろいろな方向性で活躍するというのがあります。人によっては全く考えていなかった方向性に向かうというのもあると思います。でもそういったロールモデルの情報はたくさん流れているようには思えない。

情報について最後に触れます。

キャリアアップの選択肢の情報は多くあった方が良いでしょう。でも価値がわからない整理されていない情報は混乱の原因になります。一般に人材紹介システムは使う方も使われる方も評判が悪い、信用できない、というのが定評とされています。人生を左右することですから、大事な情報は信頼できる筋を介してでないと、なかなか信用できないものです。でも信用に足るつながりは簡単にできるものではない。とすればなんかの思ってもみなかった偶然に頼るしかないのでしょうか。

たまたま思いもみなかったところがドアを開ける用意をして待っていることもあります。でもドアを開けてもらうためには、ドアを開けてもらう方も自分の履歴書や業績、売りを持っていないといけません。それは厳然とした事実です。でもセレンディピティという言葉のように、偶然につながるものとして、その用意して待っている時とこちらがドアの前に立っているというつながりを作るにはどうしたらよいか。

こちらはドアを開ける側の立場です。今は空間的な距離があってもつながりが作りやすいツールがある。それならそれを使ってみようと、この募集をしているのは、岐路に立っているだけかとつながる機会を作れないかという信号です。

このコラムやコラムの帰属先であるところの当センターの求人は、情報という意味で、従来の求人広告の枠を超えた、フランクな情報として受け取ってもらえるのではないかと思います。ドアを開ける用意をしていますよ、という信号です。

私はあなたからの信号を受け取りました。このコラムを読んでいるということはその信号です。当センターに縁があるとか縁がないかといったことを抜きにして、このコラムから岐路に立っている人に、何かを伝えることができればいいなと思います。

私からそこにおいて岐路に立っているあなたに声をかけています。あなたはそれが自分への声だと思ったらドアを押して入ってきてください。

この文章をここまで読んだあなたは岐路に立っているのかもしれませんが。

病院長 石川 達哉